

先生はこの歌の意味を解説しながら、乃木將軍がいかにも寛大に、かつ礼儀正しく敗將に接したか、その態度がいかに立派であったかを説いた。子供ながらに、なんて立派なひとなのか、と思ったものだ。

この授業はもしかしたら波紋を呼んだかもしれない。四十九年前とはいえ「水師營の会見」を、それも一年生に教えることは、当時の戦前完全否定風潮からして父母から抗議がきてもおかしくない出来事だからだ。

こんな事もあり、私の記憶のなかでは、昔風の教師である吉田先生と、明治を代表する人物である乃木希典のイメージが重なったと同時に、乃木將軍にある種の親近感を覚えた。

後年、司馬遼太郎氏も小学生時代この唱歌を歌わされた事を『殉死』を読んで知った。氏は文中「乃木ファンではない。しかしながら大正期文士が毛嫌いした様な、あのような積極的な嫌悪もない」と述べて客観的、中立的態度を表明しているが、「なぜ、これだけの大要塞の攻撃にこのような無能な軍人をさしむけたのか」「この人が自分の伯父かなにかであれば、閉口して敬遠したにちがいない」と嫌悪に近い手厳しさだ。

『坂の上の雲』は「植民地になるか、産業を興して軍事力を持ち帝国主義になるか二者択一の時代」に生きた秋山兄弟、正岡子規等の群像劇であり、日本の列強入りまでを描いた小説である。もちろん歴史書ではない。司馬氏の紡いだ明治という時代であり、その躍動感や圧巻ともいえる。しかし松山の若者達、東郷平八郎、児玉源太郎等と比べ、乃木希典の描き方はサディスティックといえる。乃木はただただ悲しい存在でしかない。

司馬氏は、彼の嫌悪する（それは自身の体験から来ているものでもあるが）昭和の陸軍における精神主義の由来を乃木將軍に見ているからなのだろうか。彼とて乃木の人格を否定しているわけではなく、福田和也氏が著書『乃木希典』で言うところの、有徳の將軍であり、それは能力の有無を超えていると考えば良いのかもしれない。

しかし、果たして乃木はまったくの愚将だったのか。実はそうではない。福田恆存氏は『乃木將軍と旅順攻略戦』で、古川薫氏は『斜陽に立つ』で、従来乃木像に対して詳細な反証、綿密な批判をしている。

たとえば、多くの読者は、なぜ乃木は肉弾戦を繰り返し、無駄に屍の山を築いたかと怒りを覚えた事と思う。それに対し両

氏は乃木の第三軍に与えられた砲弾が極端に少なく、六中隊で三十六門の砲を持っていて連隊に与えられた砲弾は、一日たった五発であったことを資料から明らかにし、攻略までの期限を切られた状況で、砲弾がなければ他にどんな手段があったのかと述べている。

砲弾を節約したのはクロパトキンとの決戦に備えるためであった。遼陽作戦を終えた児玉源太郎がやって来てからはふんだんに砲弾は提供された。

こうした事実を考慮せず、乃木を批判するのは確におかしい。旅順要塞攻略に百五十日もかけ約五万人の死傷者を出した事で乃木は批判されるが、クリミア戦争で、旅順要塞の四分の一の規模のセバストポリ攻略に英仏連合軍は一年かかり、第一次大戦のヴェルダン要塞攻略にドイツ軍は二百日を費やし、なんと三十四万人の死傷者を出している。戦車と飛行機が登場した当時も要塞攻撃の最後の戦いは肉弾戦しか無かったと古川薫氏は指摘している。

そして乃木の愚将ぶりを決定づけるのは二十八センチ榴弾砲である。

要塞攻略に決定的な威力を発揮する事になる、この砲を送ると打電した参謀本部の長岡外史次長に現地の伊地知幸介参謀長は

ああ、明治人



安倍晋三
(衆議院議員・元内閣総理大臣)

私の小学校一年の担任は、吉田虎彦という明治生まれの教師であった。吉田先生は私が二年生の時に定年を迎え、退職された。やや丸顔に黒縁の丸眼鏡、頭は見事に禿げ上がり、そして立派な口髭は彼の容貌に威厳を与えていた。

「明治生まれの男は」と問われれば、私は真っ先に先生の、この顔を思い浮かべることだろう。私の若い頃、周りに明治生まれはごろごろいた。なぜ彼なのかと言えば、それは聖職者的な厳格な態度と、こんな思

い出があるからだ。

小学一年生の私達に吉田先生は「水師營の会見」を教えた。それは戦前の文部省唱歌で、乃木將軍とロシアの將軍ステッセルの水師營における会見の情景を詠ったものだ。

「旅順開城約成りて 敵の將軍ステッセル 乃木大將と会見の 所はいずこ水師營」

「昨日の敵は今日の友 語ることもばもうちとけて 我はたたえつ彼の防備 かれは称えつ我が武勇」

なんとその申し出を断った。

「乃木軍司令部の返電は、歴史に大きく記録さるべきであろう。『送ルニ及バズ』というものであった。古今東西の戦史上、これほどおろかな、すくいがたいばかりに頑迷な作戦頭脳が存在しえたであろうか」

『坂の上の雲』のこの記述は乃木、伊地知の愚かさを多くの人達に印象づけた。しかし古川氏は『機密日露戦史』にあたり、正式な電文は「ソノ到着ヲ待チ能ワザルモ、今後ノタメニ送ラレタシ」であったと明らかにした。なんと事実とは違うのである。

乃木と同じ下関出身の直木賞作家・古川氏には乃木の名誉回復に執念を感じる。『坂の上の雲』を読んだ方には是非こちらも手にとって欲しい。

このように歴史を書くのは難しい。だから歴史小説はあくまで小説として楽しまなければならぬ。

日露戦争の結果を受け、五年後に日韓併合となった。百年にあたる今年、政府は総理談話を閣議決定し、その歴史認識を示した。歴史認識を政治が決めることは愚かなことだ。